



Title	理念なき絶対観念論 : F. H. Bradleyの形而上学についての試論 [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	白水, 大吾
Citation	北海道大学. 博士(文学) 甲第15062号
Issue Date	2022-03-24
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/85439
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	theses (doctoral - abstract and summary of review)
Additional Information	There are other files related to this item in HUSCAP. Check the above URL.
File Information	Daigo_Shirozu_review.pdf (審査の要旨)



[Instructions for use](#)

学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）

氏名： 白水大吾

主査 教授 藏田伸雄
審査委員 副査 教授 田口 茂
副査 准教授 今村信隆

学位論文題名

理念なき絶対観念論

—F. H. Bradley の形而上学についての試論—

・当該研究領域における本論文の研究成果

F. H. Bradley は存命中から大きな影響力を持ち、日本でも当時からその名は知られており、現在でも Green らとならび、「イギリス観念論者」の代表者として、またイギリスの Hegel 主義者として認知されている。しかし Bradley の哲学そのものについては必ずしも十分な研究がなされてきたわけではなく、また近年は言及されることも少ない。またその包括的な研究は日本では皆無と
いってよい。

Bradley 哲学は観念論として位置づけられることにより、必ずしも正しく理解されてはこなかったが、本論文は Bradley のテキストの緻密な解釈や、Hegel 哲学との比較、さらに Green、Bosanquet といった同時代のイギリス観念論者との比較、さらには同時代のプラグマティストである W. James との比較を通じて、Bradley の哲学は理念からではなく現実概念から出発しているという特徴を明らかにしている。「イギリス観念論」としてひとくくりにされることにより、Bradley 哲学と Green 哲学等との根本的な相違については看過されてきた。だが本研究は理念の運動を重視する立場として理解されることの多い Bradley の哲学・倫理学を、その「現実」概念との関連から明らかにすることにより Green の哲学との相違を、特に人格概念に着目して示している。

近年、英語圏の哲学研究の中で Bradley の哲学・倫理学に言及されることは増えているものの、それらの研究は現代哲学における真理概念や、倫理学における「Why Be Moral 問題」などの現代的な問題意識を投影した形で行われているものが多い。また Russell などの、Bradley の次の世代の哲学との関連から論じられているものが多く、それらは必ずしも Bradley 自身の哲学の実像を適切に反映したものではない。またドイツ観念論である Hegel との関連から分析されている研究もほとんどない。そのような研究状況の中で、Bradley 哲学の諸概念についての緻密な分析を通じて、その特徴、特に現実概念の独自性と、さらに自己実現と結びつけた独特な倫理思想の性格を明らかにしたことの功績は大きい。

また Bradley はその独特な真理概念に着目されることもあり、この分野での先行研究も多いが、安易に現代分析哲学の真理概念と結びつけることなく、その独特の性格、とくに真理概念と条件概念との関連を明らかにしている。

・学位授与に関する委員会の所見

日本ではこれまであまり読まれることがなかったが、近年国際的に一部で注目が集まり始めている Bradley の哲学・倫理学を精緻に分析し、先行研究に見られる現代的なバイアスを排除しつつ、原典に立ち帰ってその内容と意義を明らかにしたことは重要な業績である。近年海外で Bradley の哲学・倫理学に言及される場合にも、それは現代の哲学的・倫理学的問題との関連においてであり、Bradley

自身の哲学・倫理学に内在的な問題について論じているものではない。そのような状況の中で、本研究は近年の Bradley 研究について精査した上で、Bradley 哲学の研究動向を紹介するのではなく、また現代的な問題意識を読み込むことを避け、Bradley のテキストに即してその哲学・倫理学・形而上学を理解することを試みている。このような姿勢は哲学史研究として極めて高く評価することができ、同時代の現象学などの理解にも資するものである。また Bradley は次の世代の哲学者にも影響を与えているが、後代への影響を通して Bradley 哲学が歪められて捉えられてきた歴史への反省から、そのような影響関係についてはあえて論じず、Bradley の哲学の実像を正確に描き出すことに成功している。

本論文では、Green、Bosanquet、James、Hegel などとの比較は、多くの場合効果的であり、彼らとの相違を明らかにすることで Bradley の思想を明確にすることに成功している。しかし第四章での Hegel の教養概念との比較によって何が明らかにされたのかは明確ではない。また第一章から第三章（現実、経験、真理）については、Bradley の思想について詳しく解説されているのに対して、第四章の「意志」での、Bradley 自身の倫理思想についての記述は必ずしも十分ではない。

だがそのような問題点は以上のような本論文の成果の中では大きな問題ではないと委員会では判断された。また現代哲学との関連や現代的意義、さらに影響関係についてあえて論じなかったことについては、口述試験の中で、その理由が十分に説明された。

近年ではあまり着目されることなく、十分な先行研究もない Bradley の哲学について明晰な文章で論じていることは、委員一同によって高く評価された。今後本研究が、イギリス観念論を主題とする研究のみならず、19 世紀から 20 世紀にかけての哲学・倫理学・形而上学研究において参照される重要な文献の一つとなることは間違いないと言ってよい。

本論文審査委員会は以上の審査結果に基づき、本論文は博士(文学)の学位を授与するにふさわしいと全員一致で判断した。